



目次

第一章	亡国の姫君
第二章	悪魔の交歓
第三章	変化
第四章	もう一人の姫君
第五章	ラウラ救出作戦
第六章	未来へ

第一章 亡国の姫君

「ハアッ、ハアッ、ハアッ……！」

鬱蒼と生い茂る森の中、獣道をひたすら駆ける少女が一人。

見るからに仕立てのよさそうなフードをすっぽりと被り、真紅の薔薇の花びらのようなドレスの裾を指で摘んで前のめりになって走り続ける。

同じく、靴職人の技術の粋を凝らしたような装飾が施された皮ブーツには、ところどころ泥が跳ねて白い粉が吹いている。

「もう少し……もう少しでおじさまの所へたどり着くはず……！」

くしゃくしゃになった羊皮紙と封筒を握りしめ、ただただ少女は駆ける。

——彼女の名はフランチェスカ。山間の小国、マールリオ王国の産まれである。

本来ならば、彼女は王国の第一王位継承者であった。現国王・マルコーは彼女の母親、ラウラの弟である。マルコーは妻を娶ったものの、子宝に恵まれなかった。

また彼は、妾を持つ甲斐性もなく、土いじりに興じるだけの大人しく凡庸な男で——およそ一国の王となる器量は持ちあわせていなかった。

そのため、ラウラが背後で権力を握り、我が財布の如く国庫を食いつぶし、贅沢

に耽った。夜ごと行われる晩餐会、流行のオートクチュールや宝石、そして彼女のツバメのための遊興費。彼女の浪費は枚挙に暇がない。

事実上の国王であるラウラの浪費のつけは当然国民の税金となつてのし掛かる。国民は貧窮し、明日のパンも買えぬ有様。見かねた大臣や側近が進言すれば、即刻首を言い渡される。

かくしてラウラの周りには、腰巾着どもしかいなかった。国民の不満は爆発寸前。革命の機運が高まるのは当然の事であろう。不穏な空気を察知したラウラは反乱分子の弾圧を行ったが、過剰な弾圧で余計に反発を煽ってしまった。

そしてついに先日、革命を声高に叫ぶレジスタンスの扇動を受けた国民による襲撃が開始された。まずはラウラの側近や取り巻き達の館が。

続いてラウラ達の住むアペレジーナ宮殿に暴徒が押し寄せ、王政の廃止を声高に叫んだ。軍隊を総動員して肅清しようとしたが、決死の覚悟で挑みかかる革命軍に對して、軍隊の者どもも腰が引ける始末。王宮が陥落するのも時間の問題であつた。

ラウラはフランチェスカに一枚の地図と封筒を手渡し、こう告げた。

『王位継承者のあなただけでも生き延びなさい。そうすればきつといつか、王政は復活出来る。あなたはわたくしの古い知人の、カルロ・ルカレッリのもとへ行きなさい。もう話はつけてあります。この封筒をカルロに渡しなさい。彼なら、あなた

をきつと守ってくれるでしょう』

夜明け前、フランチェスカは地下道からそつと城を抜け出し、山へ向けて出発した。馬車で移動することも可能だが、状況は逼迫している。慣れぬ山で遭難するリスクよりも革命軍の襲撃を受ける可能性の方が高い。そう判断したラウラは、フランチェスカ一人をカルロの元へ送り出すことに決めたのだった。

「お母様……」

最後に言葉を交わした時の、母の青ざめた顔が脳裏をよぎる。また母と、生きて会う事が出来るのだろうか？ 母だけではない。弟や妹達は無事なのだろうか？

（……今は余計な事は考えない方が良いでしょうね）

自分とて、生きてカルロの元へたどり着けるかどうか分からない。もう三時間ほどここを走っている。気づいていないけれど、追手が来ているかもしれない。森に巣くう獣に襲われ、命を落とすかもしれない。まずは自分が生き延びる事が先決だろう。

（とにかく、今は走ろう……。おじさまのところまで）

フランチェスカはキュツと唇を結び、ブーツの踵で地面を蹴った。

（小屋が見えたわ。この辺りが、おじさまの家のはず）

少女は羊皮紙で出来た地図を広げ、目の前の小屋と交互に見比べた。

（ここは、物置小屋かしら？ それとも家畜の小屋？ それにしても、随分と小さくて粗末な小屋ですわね）

ラウラの目の前にあるのは、木材を寄せ集めて組んだだけのような、粗末な小屋だった。キョロキョロと辺りを見回したが、数メートル先に更に小さな小屋があるだけで、他に建物らしきものは見つからない。

「困ったわね。おじさまの家がわからないわ」

フランチェスカは嘆息し、頬に手を当てた。しかし長時間、ここで悩んでいる訳にもいかないだろう。

（小屋の中に誰がいるかもしれないし、道を尋ねてみましょう）

やや緊張しながら戸を叩くと、すぐに扉が開いた。中から出てきたのは、銀髪に赤い目の美しい少年だった。肌は血管が透けてみえるのではないかという程に白く透明感に溢れている。木綿のゴワついたシャツに皺だらけのズボンという貧相な出で立ちだが、そのシンプルな服がかえって彼の美しさを引き立てている。

「……誰？」

少年は低い声でフランチェスカに尋ねた。石榴のように真っ赤な瞳が彼女をじっ

と捉えた。彼の顔からは、全く表情というものが読み取れない。およそ人間離れした美貌も相まって、まるで人形のようだ。

（な、なんだか不気味な子ですわね）

赤い瞳に銀髪の人種など、マリーオ王国近辺の国にはいないはず。遠い異国の人間なのだろうか？

だとしたら言葉が通じないかもしれない。しかし、物怖じしている場合ではない。フランチェスカはマリーオ王国の近隣地域での公用語であるファレラット語で話しかけてみる事にした。

「あの……カルロ・ルカレッリという方のお宅を探しているのだけれど、ご存知ないかしら？」

「カルロ？」

少年はきよとんとしてフランチェスカへ聞き返した。どうやら言葉は通じるようだ。

「ええ。わたくし、カルロ・ルカレッリさんという男性のお宅を探しているの。ご存じないかしら？」

「カルロは、僕のお父様の名前だけど」

少年の返答から察するに、彼はカルロの縁者のようだ。だとしたらこの少年は一

体何者なのだろうか？ 『お父様』と呼んでいるということは、カルロの息子なのだろう。

ラウラからカルロは一人暮らしだと聞いていたが、知らないうちに養子でも取ったのだろうか？

「あなたは、カルロおじさまの息子さんなの？」

「ムスコじゃない」

「でも、さっきお父様って言ったわ」

「うん、僕のお父様だよ」

フランチェスカは軽い頭痛を覚えた。どうにも会話が通じない。もしかして、見た目よりも発育が遅いのだろうか？

フランチェスカが苛立ちを覚えた頃――。

「ルカ、一体どうしたのです？」

部屋の奥から、一人の中年男性が出てきた。良かった、話を通じそうな人がいた。フランチェスカはほっと胸を撫で下ろし、改めて男性へ問いかけた。

「あ、あの……。道に迷ってしまつて。この辺に、カルロ・ルカレッリという方のお屋敷があると思うのですが……ご存知ありませんか？」

「はて。カルロ・ルカレッリは私ですが？」

「……えっ……」という事は、ここは……」

「ええ、私の家です」

フランチェスカは言葉を失ってしまった。

目の前の男はとても貧相で、とても豪華な暮らしを送っていた母の知人とは思えない。身に着けているものは仕立てが良さそうではあるが、着古していて襟などくたびれきっている。

（わ、わたくしが思っていた方と全然違いますわ）

母、ラウラの話によれば、カルロはかつて、マリーオ王国一の錬金術師だったそうだ。とある理由で国を追われたものの、高い技術力を買われて他国へ武器を提供し、巨額の富を得ていると聞いていた。

だが目の前の人物はいかにも貧相で、錬金術師というよりはその下男のようにしか見えない。

「私に、何か御用ですか？」

怪訝そうにカルロに尋ねられ、ハッと我にかえる。フランチェスカは慌てて、握りしめていた封筒をカルロに差し出した。

「あっ……も、申し遅れましたわ。わたくし、フランチェスカ・デイ・ジャコモと申します。母のラウラから手紙を預かって参りました」

フランチェスカの言葉を聞いた途端、カルロの顔がパツと明るくなった。

「ああ！ 貴女がフランチェスカ姫ですか。初めまして。お母様にはとても良くして頂きました。しかし、貴女がここにいると言うことは、ラウラは——」

「はい。革命軍にお城が襲撃されました。これを」

ラウラは胸元に差し込んでいた手紙を抜き取り、カルロへ手渡す。カルロは無言で封筒を受け取り、封を切った。綺麗に折りたたまれた便せんを開き、素早く目を通す。数秒ほどで全ての文章を読み終えたカルロは、全て心得たとでも言うように頷いた。

「……ふむ、成程。予想より少し早かったようですね。長旅おつかれでしょう。まずは入って温かいハーブティでも召し上がって下さい」

カルロは目を細めて柔和な笑みを作り、フランチェスカを手招きした。

「むさ苦しいところですが、どうぞくつろいで下さい。さあ、どうぞ掛けて」

「あ……ありがとうございます」

カルロに勧められ、椅子に掛ける。朽ちかけた木で作られた椅子の脚がミシッと軋み、耳障りな音をたてた。

「ルカ。お客様にお茶を出して差し上げなさい」

「分かりました、お父様」

ルカと呼ばれた少年は小さく頷き、台所へと向かった。フランチェスカは、先ほどから抱いていた疑問をカルロへと投げかける。

「あの子は、おじさまの息子さんですか？ さつき『お父様』と呼んでいらしたけど」

「ああ、ルカですか？ あの子は貴女と同じ不幸な身の上の子でしてねえ。私が引き取り、助手として住み込みで働いて貰っているのですよ。私が親代わりでもあるので、ああ呼ばせているのです」

「そうなんですか」

何かこみ入った事情がありそうだが、初対面の人間に根掘り葉掘り聞くのは失礼だろう。フランチェスカは話題を変えようと思い、ちらりと部屋の様子を伺った。

「あの、こちらは作業場か何かなのでしょうか？ おじさまの本邸はどちらにありますの？」

「いいえ。ここが私の作業場であり、本邸ですよ」

（こんな狭くて汚い所が……）

フランチェスカは驚きを隠せなかった。あんぐりと口を開けているフランチェスカに、カルロはにこやかに語りかける。

「フフフ、驚きましたか？ まあ、お城で優雅な暮らしをされていた姫にはとっては、この家は物置小屋にもならないような粗末な小屋に見えるでしょうからねえ」

「わ、わたくしは、そ、そんなつもりでは……」

フランチェスカは頬を染めてうつむいた。自分の考えていた事を、全て見透かされたような気がしたからだ。

「フランチェスカ姫、お茶をどうぞ」

ルカがフランチェスカの背後からぬつと現れ、ティーカップを差し出した。フチが欠けた素焼きのティーカップになみなみと注がれた液体は、透き通った黄緑色をしている。まるでその辺に生えている草を絞ってそのまま汁を注いだかのような色だ。

「このお茶は何て銘柄なのかしら？ 見たことない色ですわね」

「メイガラ？ 分からない。これはリザードテイルのお茶です」

「そうなの。ありがとう。いただくわ」

ルカからティーカップを受け取り、口をつける。途端に舌に苦味が走った。青臭い草の匂いが鼻について、香りを愉しむ事も出来ない。

（熱を出した時に乳母に飲まされた風邪薬より、酷い味だわ）

眉間にシワを寄せてリザードテイルティーを啜るフランチェスカの頬に、ルカの

視線が突き刺さる。まるで眼球をピンで固定したかのように、身動きもしない。

（何なのかしらこの子。さっきからじろじろわたくしの事を見ているけど、気味が悪いわ）

ルカという名前と、彼がカルロの義理の息子であることは分かったが、彼が何者なのかさっぱり分からない。異国の人間だというだけでは説明のつかない違和感がある。

「そうだ、ご挨拶がまだでしたね。ルカ、こちらへきなさい」

「はい、お父様」

ルカはフランチェスカから視線を外すと、兵隊の行進のように手足を高くあげてカルロの傍へ移動した。

「ルカ。姫にご挨拶なさい」

ルカはカルロに命じられるままに、ぎこちなく頭を下げた。

「こんにちは、フランチェスカ姫」

「こんにちは。これからよろしくお願いしますわ」

小さくお辞儀をしてみせたが、ルカは頭を下げたまま微動だにしない。まるでねじ巻き人形のねじがきれた状態のようにぴたりと止まったままだ。

「ルカ。そろそろ頭を上げなさい」

「はい、お父様」

カルロに声をかけられ、ルカはようやく頭を上げた。

（この子……もしかして少し足りないのかしら……？）

フランチェスカは密かに眉をひそめた。だが、カルロに真実を確かめるのははばかられる。

「あ、あの、おじさまは、いつからお母様と交流があったのでしょうか？ お城にいらした事はありませんか？」

「貴方のお母様とは古い友人です。マリーオ王国の錬金術研究所へ勤めていた頃知り合いました。その頃は城にも出入りしていましたが、王国を出てからは戻っていませんねえ。お母様からいきさつは聞いていますか？」

「はい。おじさまはある事件で前国王……おじいさまの怒りを買って、国を追放された」と

「おや、かなり深いところまで打ち明けていたんですね。あの時はラウラにお世話になりました。その御礼がしたいと前々から思っていたのです。ラウラは以前からレジスタンスによる革命の気運が高まっていた事は把握していたようです。弾圧を行なったのが逆効果でしたね。せめて貴方だけでも逃がしたいとおっしゃるので、私が身元を引き受けましょうと申し出たのです」

「お母様が……」

母の深い愛情を感じ、フランチェスカの双眸からぼろりと一粒涙がこぼれた。

「ご、ごめんなさい。泣いている場合ではありませんのに」

慌てて涙を拭うフランチェスカの肩に、カルロの手が置かれた。

「とんでもない。辛い目に遭われたのでしょうか？　こんな辺境までは、レジスタンスも探しに来ないでしょう。むさ苦しいところだけど、しばらくのんびりして下さい。落ち着いたら身の振り方を考えましょう」

カルロの手の平の温かさが肌に染みこむ。人の情けとは、こんなに有り難いものだったのかとしみじみ感じる。

「わたくし……お城には、もう戻れないのでしょうか？」

すがるようにカルロを見上げると、カルロは目を伏せて首を横に振った。

「それは、私にはわかりかねますね。なにしろこんな世捨て人のような生活を二十年以上も続けていますし。国の情勢も、ラウラの手紙でしか知りませんから」

「そうですか……」

フランチェスカは力なくうなだれた。気休めでも『必ず戻れますよ』という言葉葉が欲しかったのに。

「キーンツ、キーンツ！」

耳障りな金切り声が鼓膜を震わせる。恐る恐る顔をあげると、部屋の隅に置かれたカゴの中に、野ネズミが入っている。

「ヒッ……！」

驚きのあまり、フランチェスカは短い悲鳴をあげてしまった。

「ああ、うるさくてすみませんねえ。なにしろ狭いので、実験用のネズミや小鳥を置く場所がここしかないですよ」

口では謝っているが、カルロは悪びれた様子は全くない。むしろこの環境は、彼にとってごく当たり前のものなのだろう。

（実験？ 動物なんか使って、おじさまは一体何を作っているの？）

ルカも不気味だが、カルロはルカとは違う得体の知れなさを感じる。

武器を近隣諸国へ輸出していると聞いていたが、カルロが作っている武器とは一体何なのか、何故国を追われる身となったのかは一切明かされていない。しかし、抱いた疑問をカルロにぶつける訳にもいかない。

ラウラが自分にそれらを明かさなかったのも、きっと理由があるはず。迂闊にカルロの逆鱗に触れて追い出されてしまったのは、元も子もない。もう自分には、行く所がないのだ。何も永遠に世話になる訳ではない。いつか国が落ち着いたら、母や弟妹達へ会いに行ける日も来るだろう。

(それまで……しばらくの辛抱だわ)

フランチェスカはギュッとスカートの裾を握りしめた。

「ふう……」

ベッドに腰掛け、フランチェスカは小さくため息を吐いた。あらかじめ支度を整えてくれていたらしく、ルカに案内された部屋は綺麗に片付いていた。

(下女の部屋よりも狭いのではないかしら)

手慰みにシーツを撫でてみる。ぱりつと糊が効いていて、手触りは悪くない。ややゴワゴワしているのは、シーツ自体の素材が安物なせいだろう。

フランチェスカはぐると部屋を見回してみた。片付いてはいるが、家具は小さなチェストが一つと、椅子と机が一組ずつ。それも、かなり使い古しているのだろう、木の色が黒く変色していて傷跡があらこちらについている。

彼女がかつて暮らしていた王宮の部屋とは、あまりにも違いすぎる。今までのような暮らしは出来ないであろうと覚悟はしていた。けれど、改めて現実を見せつけられると、これからの生活に絶望してしまいそうになる。

(いけない、つい暗くなってしまう)

フランチェスカはふるふると首を横に振った。

（生きているだけでも、ありがたいと思わなくてはいけないわ）

ほんの数時間前まで、死の恐怖におののきながら走り続けていたのだ。こうして屋根のついた部屋でくつろげるだけましと言えるだろう。まずは着替えようと、トランクから寝間着を取り出した時だった。不意に部屋の扉が開き、銀髪の少年がヌツと姿を現した。

「きゃあああッ!」

フランチェスカは驚いて寝間着を放り出し、床へへたり込んだ。ルカは全く表情を変えず、棒立ちのままフランチェスカを見下ろしている。

「ノ、ノックもなしにレディの部屋に入ってくるなんて失礼よ!」

「レディ?」

「最低限のマナーでしょう? さつきから思っていたけれど、あなた、わたくしに對して無礼ではなくて?」

「ブレイ?」

「そうよ。わたくしはジャコモ家の長女。マールリオ王国の王位継承者よ。本来なら、あなたごときが口を利ける相手ではないのだから!」

ルカは小首をかしげ、きょとんとしている。

「レディって何? オウイケイシヨウシャって? ブレイって?」

平坦な口調でルカがフランチェスカの言葉を反芻する。矢継ぎ早に質問され、フランチェスカはポカンとしてしまった。

「呆れた！ あなた何にも知らないのね！」

「知らない。僕は、ここから出たことがないから」

ルカはぼそぼそと答えた。真っ赤なルビーのような瞳には、およそ生氣というものが感じられない。口調も抑揚がなく、怒っているのか悲しんでいるのかさっぱりわからない。

（おじさまは一体、この子をどこから引き取ったのかしら）

「ねえ、レディって何？ オウイケイショウシャって何？ ブレイって何？」

しつこく質問し続けるルカに苛立ち、フランチェスカは一気にまくしたてた。

「レディはわたくしのような高貴な身分の女性の事！ 王位継承者は、次期国王になる人間の事！ 無礼っていうのは、あなたがわたくしにしているような、失礼な振る舞いの事よ！ これで分かった」

「……多分」

ルカは分かったような分からないような、曖昧な顔をして頷いた。

「まあいいわ。それで、わたくしに何の用事ですか？」

「特に用事はないけど」

「用がないなら出ていってくださる？　いつまでもレディの部屋に居座るのは失礼よ！」

フランチェスカは腹立ちまぎれに、手元の枕を掴んでルカへ投げつけた。ルカは危機感を覚えていないのか、避けることなくぼんやりと同じ場所に突っ立っている。

「ブレイな事をしたみたいだから、僕出て行くよ。おやすみ」

ルカはそう言うのと、例のぎこちない動きで部屋を出て行った。

「何なのかしら。あの子……。本当に、気味が悪いわ」

あんな少年と寝食を共にしなくてはならないとは、気が重い。

「……はあ。考えても仕方ないわ。今日はもう寝ましょう」

フランチェスカは床に落ちたままの寝間着を拾いあげ、ベッドの上へ置き直した。小さなトランクの中からリネンを取り出し、体を拭う。薔薇の香水を染みこませたリネンからは、懐かしい王宮の匂いがした。

リネンの匂いを胸一杯に吸い込む。肺を薔薇の香りで満たすと、自分が正当な王位継承者であるという誇りが蘇ってくる。

（そうよ。わたくしはマリーオ王国の次期女王、フランチェスカ・デイ・ジャコモ）母はいつも言っていた。どんな時でも誇りを忘れてはいけないと。

（お母様……フランチェスカは必ず生き延びます。そして必ずお母様と弟妹達をお

救いたします）

ベッドに腰掛け、両手を合わせて祈りを捧げる。どうか愛する家族が無事であり
ますようにと。

「おやすみなさい、お母様、ヨハン、マリア」

どこへいるとも知れぬ家族の名を呼び、フランチェスカはベッドへ潜り込んだ。

第二章 悪魔の交歓

「……ん……」

ゆっくりと意識が引き戻され、まだ重いまぶたを持ち上げる。
緊張のせいかな、眠りが浅かったようだ。

(……あら……?)

だんだんと目が慣れて来ると、様子がおかしい事に気づく。

視界に入るのは、薄暗い石づくりの天井。ぼうつと薄い明かりがまぶたを照らす。
頭や背中に触れるのは硬くつめたい石床のようだ。さっきまで寝ていた部屋とは全く違う。自分は確かに部屋で寝支度を整え、粗末ながらも清潔なベッドに潜り込んだはずだ。

(何、ここ……? わたくし、さっきまで部屋で寝ていたはずなのに)

とりあえず身を起こそうと背中を持ち上げた。が、身体が鉛のように重だるくて動かない。

(一体、何が起こっているの……?)

どうにか頭を持ち上げて自分の姿を見ると、寝る前に着替えたシルクのネグリジ

エは脱がされ、ショーツだけにされている。

(どうして、こんなことに?)

薄明かりの方向へ、首を向ける。ロウソクの明かりの下で貧相な中年男が背をま
るめて壁に向かい、カシヤカシヤと何かをかき混ぜている。

「……おじさま……?」

無意識に声が出てしまっていたらしい。カルロが振り向き、フランチェスカの元
へ近づいてきた。

「おや……予定より早く目が覚めてしまったようですねえ」

薄明かりに照らされたカルロの顔は、昼間の太陽光の下で見るより何倍も不気味
だ。やせこけて目ばかりがぎよろぎよろして、子供の頃絵本で見た悪い魔法使いを
連想させる。

「お、おじさま……。あの、わたくし、どうしてここに……?」

「それは、これから説明いたしますよ。ルカ、入りなさい」

カルロが扉越しに声をかけると、僅かに扉が開き、青白い顔をした少年が中へと
入ってきた。

「はい、お父様」

「姫。今日から貴女は、ルカと交わっていただきます」

フランチェスカは視線を往復させ、カルロとルカを何度も見比べた。カルロの理論は飛躍しすぎていて全く意図が分からない。

「おじさま。どういうことですか？ ま、交わるって……」

「ルカは、私が作ったホムンクルスと人間の間に出来た人外の子でしてね。ぜひとも、彼の遺伝子を受け継いだ子を作りたいと思っていたところなんですよ」

カルロが不気味な笑みを漏らす。フランチェスカは瞬時に、自分の置かれている状況を理解した。

「……まさか、私にルカの子を産めと……？」

「おや、理解が早くて助かりますよ。若く健康な肉体を持つ貴女なら、きっと良い子を産める。期待していますよ」

背筋がぞわつと波打つような悪寒が押し寄せてくる。

「化け物と交わるなんて！ 冗談はよしてください」

「化け物ではありませんよ。私が心血を注いで創りだした生物——ゲノムです」

「おじさまが……？ マーリオ王国では、生物の練成は禁忌だったはず……」

「ええ。ゲノムを創りだした私は、その罰として国を追われたのです」

カルロの告白を耳にし、フランチェスカの顔から血の気が引いた。自分は何とおぞましい男の元に身を寄せてしまったのだろうか。

「神様に背くなんて……おじさまは、邪教の徒よりも恐ろしい方だわ」

震える唇から紡ぎ出される侮蔑の言葉に、カルロは僅かに眉をひそめた。

「まだあの愚かな法は変わっていないようですね。ラウラも、教典までは手を出せなかったという事ですか。ククク」

「お、お母様は……まさかあなたの正体を知っていて、わたくしをここへ預けたんですの？」

「勿論知っていますよ。ですが、あなたを助ける為に必死だったのでしよう。ラウラの振る舞いでは、味方もろくにいなかったでしょうしねえ。自分の娘だけは大丈夫だと思っていたのでしょうか、全く浅はかな考えですよ」

頭の中が真っ白になる。命がけでここまで走り、ようやく安息を得たと思ったのに。死ぬよりも恐ろしい目に遭おうとは。

「い、いや……っ」

飛び起きて石床から逃げだそうとするが、目覚めた時に感じた重だるさが更に増し、指一本動かすことすらままならない。

それでもどうにか手足を持ち上げようとするフランチエスカの顔を、カルロが愉快そうにのぞき込んだ。

「ああ、言い忘れておりましたが……昼間にお出ししたお茶。あれには身体を一時

的に麻痺させる作用がありましてねえ」

「……っ！」

昼間ルカと交わした会話が、脳裏に蘇る。

『このお茶は何て銘柄なのかしら？ 見たことない色ですわね』

『メイガラ？ 分からない。これはリザードテイルのお茶です』

『そうなの。ありがとう。いただくわ』

「……卑怯者ッ……！」

精一杯の憎しみを込めカルロをにらみ付ける。が、当の本人はどこ吹く風だ。

「心配せずとも、明日の朝には抜けますよ。さて、下準備に入りましょうか」

カルロは手袋を嵌めると脇に置かれていたボウルを手に取り、半透明の液体をスプーンですくってフランチェスカの下腹部へ塗りたくった。

「ひ……っ」

冷たくぬるぬるした感触に、ぴくりと身体が引きつる。何をされるのか分からない恐怖で、頭がどうにかなりそうだ。

カルロは事務的に液体を塗りおえると、ルカの方を見た。

「さて、これくらいでいいでしょう。ルカ。用意をなささい」

「はい」

ルカがフランチェスカの前に立ち、シャツとズボンを脱ぐ。ぶかぶかの衣服に覆われていた細く白い体が、薄明かりに照らされてぼんやりと光る。

薄い胸や筋肉のついていない二の腕だけを見ていると、まるで痩せた少女のようにも見える。だが、むき出しになった下半身の中心で屹立している生殖器は、彼が雄である事をはっきりと示していた。

「ねえ、ルカ……やめて……。どうしてあなたが、こんなことするの？」

「お父様の命令だから。お父様の命令は絶対に聞かないといけないんだ」

「そんな……こんなめちやくちやよ。お願い、やめて。ね？」

出来るだけルカを刺激しないよう、優しく言い聞かせようとする。しかしルカは黙って彼女の上に覆い被さった。

「……………」

「……………」

微動だにしないルカへ、カルロが声をかける。

「ルカ。まずは自由に身体へ触れてみなさい」

どうやらルカは、性行為は初めてのようだ。

どんな暴虐を働かれるのかと怯えていたので、拍子抜けしてしまう。

「……自由に……」

ルカは無表情のまま、ゆっくりとフランチェスカの頬に触れた。そのまま顔の輪郭を辿り、鎖骨を辿り、乳房の膨らみに触れる。

「……柔らかい」

ルカの指が何度も丸みを帯びた乳房を撫でる。確かめるようなそれは愛撫と呼ぶには拙いものであったが、初めて異性に触れられたフランチェスカの官能を呼び覚ますには十分だった。

（何……これ……身体がどんどん、熱くなつて……っ）

「……これは……何……？」

ルカが首を傾げながら、桃色の乳首を指腹で押す。途端に、乳房の中心から甘い痺れが広がり、フランチェスカの唇から吐息が漏れた。

「あ……っ……♡」

「おや、快感を得ていらっしやるようですね。良い傾向です」

「わ、わたくし、快感だなんて、そんな……っ」

「念のため、催淫剤を塗布しておいたのですが……思っていたより効果が現れるのが早かったようです。フッフ」

カルロの言葉を聞いて、フランチェスカは僅かに安堵した。

今自分が得ている感覚は、薬のせいなのだ。決して、自分自身が感じているわけ

ではないのだと。

（薬を塗られているのなら……仕方ないですわね）

「コレ……固くなってきた……」

触れられて固くしこりはじめた乳蕾の様子が面白いのか、ルカは乳首を指で摘まんで軽く引つ張り、指腹でつぶしはじめた。

「ふああ……♡ち、乳首をそんなに弄っては……っ♡」

「……コレ、気持ちいいの？」

「し、知りません……あっ♡ふう……♡はあああ……っ♡」

否定しようとするが、漏れるのは甘ったるい嬌声ばかり。

言い訳を得たせいか、身体の芯を取り巻くようなむずむずとした快感の粒は、次第に大きくなっていく。

「……気持ち、いいんだ」

ルカの頬へ僅かに赤みがさす。屹立した乳首をこね回し、ぴんと弾く。

「ひああああ……♡やっ、やめてえ♡」

はしたない声が、フランチェスカの喉からほとばしる。こんな淫らな声が自分へ発せられるなんて信じられない。

「もっと……してあげる」

ルカの指がへそをたどって下腹部へ伸びる。

「これ、クリトリスって言うんだよね。お父様から教えて貰った」

「あ……そ、そこは、ダメ……っ」

必死に身体をよじるが、痺れてうまく動かない。

ルカの指がぴったりと閉じた淫唇へ触れ、埋もれた肉芽を根元から押し上げられた。

「んひいいい♡♡♡」

一層甲高い嬌声が響き、フランチェスカの腰が大きくしなった。

「さっきより……感じてる？」

「そっ♡ そんなこと聞かれても♡ わかりませんっ♡ あっ♡ あんっ♡」

「……すごい、腰ビクンビクン跳ねてるね。嬉しいんだ。姫が感じてると、なんだか、ぼくも……身体が熱く、なってくる」

ルカがボソボソと呟く。淡々としたトーンの中に、うつすらと高揚が混じっている。

「こっ♡♡ こんなのっ♡ おかしい……ですわっ♡ んっ♡ ああ♡ 愛し合っ
てもいいのになっ……♡」

「……アイって何？ そんなの、教えてもらってない。ただ姫を、気持ち良くさせ

ただけ」

ルカの指が執拗に肉芽を責め立てる。尖った先端を指で押し潰し、包皮を剥いて膨らんだクリトリスを露出させる。

勃起した肉粒はヒクン♡ヒクン♡未知の愉悦に打ち震えている。

オナニーすら知らないフランチェスカには、あまりにも強すぎる刺激だった。きつと、催淫剤のせいだ。今の自分はまともな状態ではない。

だから、こんな淫らな声をあげて、自分から足をパカッ♡と開いて求めてしまうんだ。

「もう、クリトリスパンパンだね。破裂しそう」

クリュ♡ クリュ♡ クリュ♡ クリュ♡

ルカの指が容赦なく膨らみきった花芯を抜く。途方もない快感の波が押し寄せて、

もう頭がどうにかなくなってしまいそうだ。

「あ♡ はあ♡ もお……ゆるして♡」

「許すって何？ わからない。姫のいやらしい声、もっと聞きたい」

ぬりゅぬりゅ♡ こりこり♡ ぬちょ♡ ぬりゅ♡

淫裂から滴り落ちる蜜を屹立した肉芽に擦りつけ、指腹で何度も激しくすりつぶ

される。

襲い来る喜悅の渦に飲まれ、もう理性は崩壊寸前だ。

突起を見せつけるように腰を突き出し、尻たぶをわななかせろ。

「だめ♡ だめだめだめだめだめ♡ わ、わたくし、こんなの、あつ、イクつ、イキます♡ ああああああああゝ♡♡♡」

ぷしゅっ！

膣穴から透明な液体が噴き出し、冷たい石床を濡らした。

「あ……♡ ああ、ふああ……♡ はあ、はあ」

「おや、初めてだというのに潮を吹いたのですか？ ルカがここまで熱心に愛撫するとは驚きです。姫との相性はとてもいいようですね」

カルロがフランチェスカの股間をのぞき込み、顎に手を当てて感心したように言った。

こんなはしたない姿をまじと見られているというのに、羞恥心すら湧かない。全身を駆け巡る淫らな熱に浮かされ、息も絶え絶えだ。

「あ……ああ♡ は……うう♡」

唇はだらしなく半開きになり、唾液が口端を伝って顎へ垂れ落ちていく。

鏡を見ずとも分かる。今の自分はとてつもなくだらしない顔をしていると。

「……姫は、どうしてしまったんでしょうか？」

ルカが不思議そうに、カルロへ尋ねる。カルロは目を細め、カエルのように足を突っ張らせてヒクついているフランチェスカの花芯を指さした。

「ルカの愛撫のおかげで、姫へ種付けを行う準備が整ったのですよ。ほら、ごらんなさい。こんなに濡らして……」

石榴のように熟れた淫裂からは、とめどなく蜜が滴り落ちている。

腹の奥が疼いて、秘奥が収縮するのが分かる。

―欲しい。ルカのモノが、大きく逞しい肉茎を、自分の中に迎え入れたい。

（ダメよ……そんなことをしたら、私は傷ものになってしまうのに）

『フランチェスカ。あなたはジャコモの血統を継ぐただ一人の娘。生き延びて、その血を正しく残すのよ』

別れ際に言われた母の言葉が脳裏をよぎる。快楽に吞まれてはいけない。誇りを持ち、毅然としていなければ―

「……ッ！」

フランチェスカの決意は、あつという間に打ち砕かれた。

気づけばルカが自分の上に覆い被さり、そそり勃ったペニスを秘裂へ押しつけているではないか！

「や……っ、やめて……！　そ、それだけは……！」

「でも、これがお父様の『目的』なので。達成しないといけない」

「こんなの……おかしいわ！　ねえ、お願い……！」

涙ながらに訴えるが、ルカには届かない。

赤銅色の亀頭が陰核に擦りつけられると、収まりかけていた淫熱が再び燃え上がり、フランチェスカの身体を支配する。

「……っ♡♡　そっ♡♡　それはダメだっ♡♡　言っただのに……っ♡　あああ♡」

ぬりゅ♡　ぬりゅ♡　ぬち♡　ぬち♡　ぐちよ♡　ぐちよ♡

肉茎が割れ目を上下し、蜜を絡ませて秘唇を擦り上げる。

ぷっくりと膨らみきった肉唇は、自ら陰茎に吸い付いて挿入を促す。

（だめ♡　中につ♡　挿れてほしい♡　どうしよう♡　私……っ）

——ずにゅっ♡

「ふああああ♡♡♡」

不意に、ペニスの先端が淫唇を割開く。

存分に濡れそぼった膣肉は、待ちわびていたようにルカの肉棒を迎え入れる。

「うそ♡　やだ♡　やめて……♡　入っちゃったら、わ、私……っ♡♡」

恐いの、イヤなのに。腰は勝手に浮き上がり、バキバキに勃起したルカの肉棒を奥へ引きずり込んでしまう。

ルカが体を前に倒し、更に抜き身を奥へ押し込む。ぷちんと何かが弾けるような感覚に続いて、粘膜を灼くような熱がフランチェスカを覆い尽くした。

「あ……ひいいッ♡ や……ああ♡ くる……し……ッ……♡」

「はあ……あ……っ。ぜんぶ、入り……ました……」

ルカが大きな吐息を漏らし、カルロへ報告する。

「おめでとうございます、フランチェスカ姫。あなたはたった今、牝として一人前になったのです」

（牝……ですって♡ どこまでもわたくしを家畜扱いしてっ……♡）

カルロをにらみ付けようとする。だが顔の筋肉すらも弛緩して、うまく表情が作れない。蕩けるような悦びに、理性はあっけなく崩壊してしまう。

「く……ふ……う……うっ……。姫の中……狭くて……噛みつかれてる、みたい……」

ルカは苦しげに呻き、腰を前後にガクガクと揺らす。ルカ自身も未知の感覚に戸惑い、どう動いていいのか試行錯誤しているようだった。

「ルカ。落ち着きなさい。しっかりと深く突き入れ、姫の子宮へ射精するのです。」

目的は子を為すこと。それを忘れてはいけない」

「は……い……。おとう、さま……」

額に汗を浮かべ、ルカのモノがより深くフランチェスカの中へ押し入ってくる。ずんつ、と腹の底を押され、圧迫感で顔が歪む。

「おおおお♡ んおお♡ あっ♡ ひいん♡」

見開いた目から大粒の涙がボロボロとこぼれる。それは苦悶か、それとも歓喜の涙なのか。もうフランチェスカには何がなんだか分からない。

ただ有るのは、膣をみっちり埋め尽くす肉茎の感触が、たまらなく心地良いことだけ。

（どうしよう♡ これ、好き♡ 拒絶しないといけないのにつ♡ ダメなのに♡）
ずりゅ……♡ ずりゅりゅ♡ ぬりゅ♡ ぬずりゅ♡

膣壁が龟头と擦れあい、絡まり、引きずり出される。全て、フランチェスカにとつては初めての経験だ。

ごりゅ♡ ごりゅ♡ ぐりぐりっ♡ ぐりっ♡

ルカが腰を突き入れ、膨らんだ肉天井を押し上げる。きゅうつと腹の奥が縮み上がるような感覚に、フランチェスカの腰が跳ねる。

「んっひいひい♡ やああ♡ もうやめてっ♡ 私をこれ以上感じさせないで

っ♡」

「はあ……はあ……今……姫のおまんこが、きゅつとした……。これ、好きなの？」
「好き……じゃないいい♡ もうイヤなのっ♡ 感じたくないのっ♡」

「イヤなんだ……でも……やめない。姫に種付け、するためには……姫を、感じさせないと、いけないから……っ」

ルカの抽送が一層早くなる。力強いピストンで秘奥を叩かれ、快樂電流が尾てい骨から頭のとっぺんまで一気に駆け上がる。

「んああああ♡ ダメ♡ 奥だめっ♡ ごりごりだめえええ♡♡♡」

亀頭が子宮と密着し、ぐりぐり♡ と押し上げているのが分かる。パンパンに張り詰めた肉茎は限界を訴えるようにわなないて、終わりが近いことを予感させる。

「あ……あああ……。おとう、さま……。僕、もう……」

ルカが喉を反らせ、かすれた声でカルロへ報告する。ルカの変化を悟ったカルロの口端が、みるみるうちにつり上がった。

「ああ……ついに来たのですね。ルカ。姫の中に——思い切り放出しなさい」

「いやああ♡ やめて♡ お願い♡ 中は……♡ 中だけはああああ♡♡」

イヤだイヤだと懇願しながらもう、フランチェスカの腰は淫らにくねり、自ら子

種を望むように膣壁をヒクつかせてペニスへすがりつく。

ルカの律動が早まり、フランチェスカの秘奥を激しく突き上げる。

ドチュツ♡ ドチュツ♡ ドチュツ♡ ズブツ♡ グリグリ♡

ずしん、ずしんと重たい衝撃が子宮を貫く。圧着した亀頭に子宮が押し潰されてしまいうだ。

「ああああああ♡ だめ♡ だめ♡ だめだめだめだめだめえええ♡♡♡」

「うくっ、あっ……ああああっ……！」

ルカがのけぞり、ぶるぶると腰を震わせた。

刹那—

ぶびゅっ♡ びゆくびゆく♡ どぶっ♡ どぶんっ♡

亀頭の先端から白濁が迸り、子宮口へと流し込まれる。飢えた子宮口は歓喜にわななき、パクパクと開閉して子種汁を自ら吸い上げる。

「ああああ……♡ 嘘、嘘よおおお……♡ こんな……♡ つ♡ あああ……♡」

今胎内にあるのは、異形の子種だ。たった今自分は、苗床へと堕ちたのだ。

「ああ……素晴らしい！ ルカ、よくやりましたね。今日はささやかにお祝いをしましょう。チーズとワインを倉庫から出さなくてはいそいそとフランチェスカの股間の

カルロが目を輝かせ、スポイトを取り出していそいそとフランチェスカの股間の

前にしゃがみ込む。チュツ、と臆粘膜にガラスの管が密着し、白い粘液を吸い上げる。カルロはそろそろとスポイトの先端を小瓶に差し入れ、粘液を瓶の中へ閉じ込める。

瓶の中に入っている精液は、たった数CC程だろう。

こんなもののために、自分の貞操は奪われたのだ。カルロという男の欲望のために、自分の未来は奪われたのだ。ゲノムという彼が作り上げた、悪魔の生物の養分にされるただけに。

「今日の交配はこれで終了です。姫、お疲れ様でした。良かったら秘蔵のチーズをご馳走しますが、いかがですか？」

「……いりませんわ……一人に、して……」

「そうですか。お疲れでしょうし、ゆっくりお休み下さい。ルカ、もう行きましよう」

「……はい、分かりました。お父様」

カルロに背中を押されるように、ルカは部屋を出て行った。

「……っ、うっ、ううう……」

一人になった途端、涙が両目から滝のように溢れて流れ落ちる。きつと今の自分の顔は、猿のように真っ赤でみっともないのだろう。けれども、美しくある必要

などない。

「お母様……わたくし……もう、おしまいですわ……」

自分の体はもう汚れてしまった。母が望むような相手の元へ嫁ぐどころか、人間として生きることすら叶わないのだから。

「ああ……あつ、あああああつ……。わたくし、どうすればいいの……。こんな……あんまりですわ……。うつ、うううつ……」

フランチェスカの慟哭が薄暗い地下室へ響く。泣いても泣いても、涙が涸れることはない。

このまま体中の水分がなくなって、干からびてしまえばいいのに。馬鹿馬鹿しいと分かっている、そう願わずにはいられなかった。

「あなた、いつまでこの部屋にいるつもりよ。出ていきなさいよ」

フランチェスカは心底うんざりした声でルカへ告げた。

「でも、お父様が、できるだけ姫のお傍にるようにと言っていたので」

「ああそうね。あなたにはお父様の命令が絶対だものね。わたくしが死んだり逃げたりしないように、監視してるんでしょう？」

「……死ぬのは……」

「ダメなんでしょう？　ご心配なく。死なないし逃げないわ。わたくしは、お母様や妹達に会う日まで、耐えぬくって決めたんだから。でもあなたもあなたのお父様も、わたくしは絶対に許さないわ！　

フランチェスカはルカへ向かって憎しみたつぷりに叫んだ。翡翠色の瞳は沼の底のように曇り、頬は青白くくすんでいる。カラスの濡れ羽のような漆黒のウエーブヘアはもう何日も櫛を通していないせいで、枯れた小枝のようにバサバサだ。

ルカと交わって以来、フランチェスカはずっと部屋に閉じこもっていた。カルロが用意した食事には一切手をつけず、日がな一日ベッドに伏せている。衰弱死を恐れたカルロの命令で、ルカは一日中フランチェスカのベッドの傍について彼女を監視しているのだ。

「僕は……姫に悪いことを、してしまったの？」

無邪気な疑問をぶつけられ、ずたずたに傷ついた心がますますささくれだつ。フランチェスカはルカを横目で睨み、嫌みったらしく唇を歪めて笑った。

「善悪の判断もつかないって訳ね。ええそうよ。最悪だわ。あなたとは仲良くなれそうだと思うたのに！」

「悪いことをしたのなら、謝る。ごめんなさい」

ルカはぺこりと上半身を九十度に折り、フランチエスカへお辞儀をした。ルカは
何がフランチエスカをこんなに傷つけているのか、全く理解していないのだ。そう
悟った瞬間、フランチエスカの頭は火にかけたようにグラグラと煮立った。

「謝れば済むと思ってるのに、ふざけないで！」

腹立ちまぎれに手元にあったものを掴み、滅茶苦茶に投げつける。ルカは避ける
事もせずに、黙ってその場に立ち尽くしていた。

「何よ！ 何よ！ 何よ！ あなた、わたくしがどうして傷ついているのか、分か
つてはいなくせに！」

「言葉だけの謝罪なんかいらないわよ！ だったらあなたのお父様みたいに、開き
直ってくれた方がよっぽどましだわ！ 嫌い、嫌い、嫌い！ あなたなんて、大っ
嫌い！！ 今すぐここからいなくなりなさいよ！！」

力いっぱい香水瓶を投げつけると、ルカのこめかみから一筋赤いものが流れた。

「あっ……」

ルカは血を拭う事もせず、相変わず棒立ちになっている。

「ご、ごめんなさい。わたくし……」

「……お母様も、姫と同じ事言ってた。いつもあいつを殺してやりたいって言っ
た」

「僕の事もキライドって言ってた。姫も、僕をキラうんだね」

ルカはそう言つて目を伏せた。ルカの『お母様』がどういった素性の者なのか、全く聞かされてはいない。だが、カルロに引き取られて助手をやっているという身の上から察するに、ろくに母親の愛情を受けていないのだろう。

いつもぼんやりとしているのも、言動が的外れなのも、コミュニケーション不全から来ているのだとすれば納得がいく。だからといって、ルカの行動全てを肯定する事は出来ないのだが。

「……き、嫌いつていうのはその……言い過ぎたわ。ごめんなさい」

フランチェスカはもともと口ごもった。激しい怒りをぶつけた手前、謝るのはどうにも決まりが悪い。ルカはフランチェスカの言葉を聞き、伏せていた顔を上げて再び彼女を凝視する。

「キラいじゃなくなつたって事？」

「し、知らないわよ！　でも勘違いしないで頂戴ね！　あなたの事を好きになつた訳でもないんだから！」

「キラいじゃないなら、いい」

相変わらずの無表情だが、瞳は希望の光りをともしている。どうやらルカにとつて『キラわれる』のが何よりも悲しむべきことのようにだ。

「と、とりあえず額の手当をして差し上げるわ。ええと、確かこの辺に救急箱が……」

フランチェスカはチェストの引き出しを開け、救急箱を探す。三段目の引き出しの奥に鎮座する小さな箱を見つけ、いそいそと取り出した。

「あったわ。さあ、じっとしていて。今消毒するから」

フランチェスカはガーゼをハサミで切り、ルカの額に当てた。ルカは直立不動の姿勢を取り、されるがままになっている。

「さあ。これで良いわ」

フランチェスカはルカの肩をぼんと叩いた。ルカは不思議そうに、額のガーゼを撫でている。

「どうして、僕の傷を手当してくれたの？」

「怪我をさせたのは、悪いと思ったからよ」

「僕の事、キラいじゃないって事？」

「さっきそう言ったでしょ！ しつこいわね」

「分かった。ありがとう」

ルカは少しだけ口端を上げて目を細めた。どうやら笑っているつもりらしいが、かなりぎこちない。そんな様子からも彼の不器用さが伝わってきて胸が痛くなる。

「いいからもう出て行きなさいよ。それと……」

「何？」

「……パンを持ってきて」

「姫、ずっと食べたくないって言ってた」

「お腹空いたのよ！ いいから持ってきてなさい！」

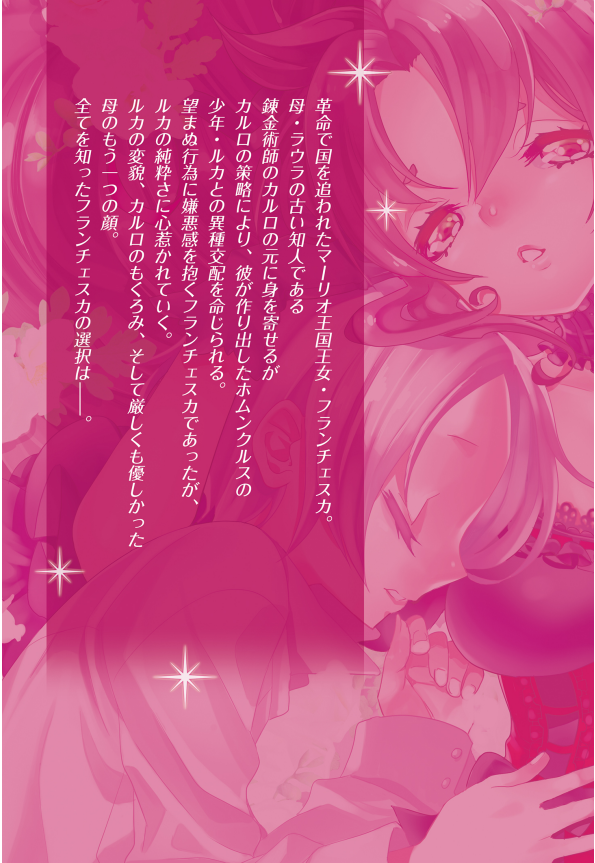
「分かった」

ルカは頷くと、部屋を出て行った。

「……嫌いじゃないけど、好きでもないわよ……。だって可哀想な身の上の子なん
だもの。同情してるだけよ……」

誰に言うでもなく呟くが漏れる。そうだ、これは同情だ。施しの感情にすぎない。
フランチェスカは胸に手を当て、自分にそう言い聞かせた。

《体験版はここまです。続きは製品版でお楽しみください》



革命で国を追われたマリーオ王国王女・フランチェスカ。
母・ラウラの古い知人である
錬金術師のカルロの元に身を寄せるが
カルロの策略により、彼が作り出したホムンクルスの
少年・ルカとの異種交配を命じられる。
望まぬ行為に嫌悪感を抱くフランチェスカであったが、
ルカの純粋さに心惹かれていく。
ルカの変貌、カルロのもくろみ、そして厳しくも優しくかった
母のもう一つの顔。
全てを知ったフランチェスカの選択は――。